

「せとうち発見の道」企画展

## 「瀬戸内市の古代寺院

～古代寺院から瀬戸内市の何が見えるか～

2021年11月30日（火）～2022年2月27日（日）

瀬戸内市民図書館

瀬戸内市内で見つかっている「古代寺院」は、7世紀中ごろなど、備前東部地域でも早い時期から建てられています。

仏教が日本に伝来し、地方にも浸透していく中で、寺院は建立されました。古代寺院とは、地域にとってどのような存在だったのでしょうか。

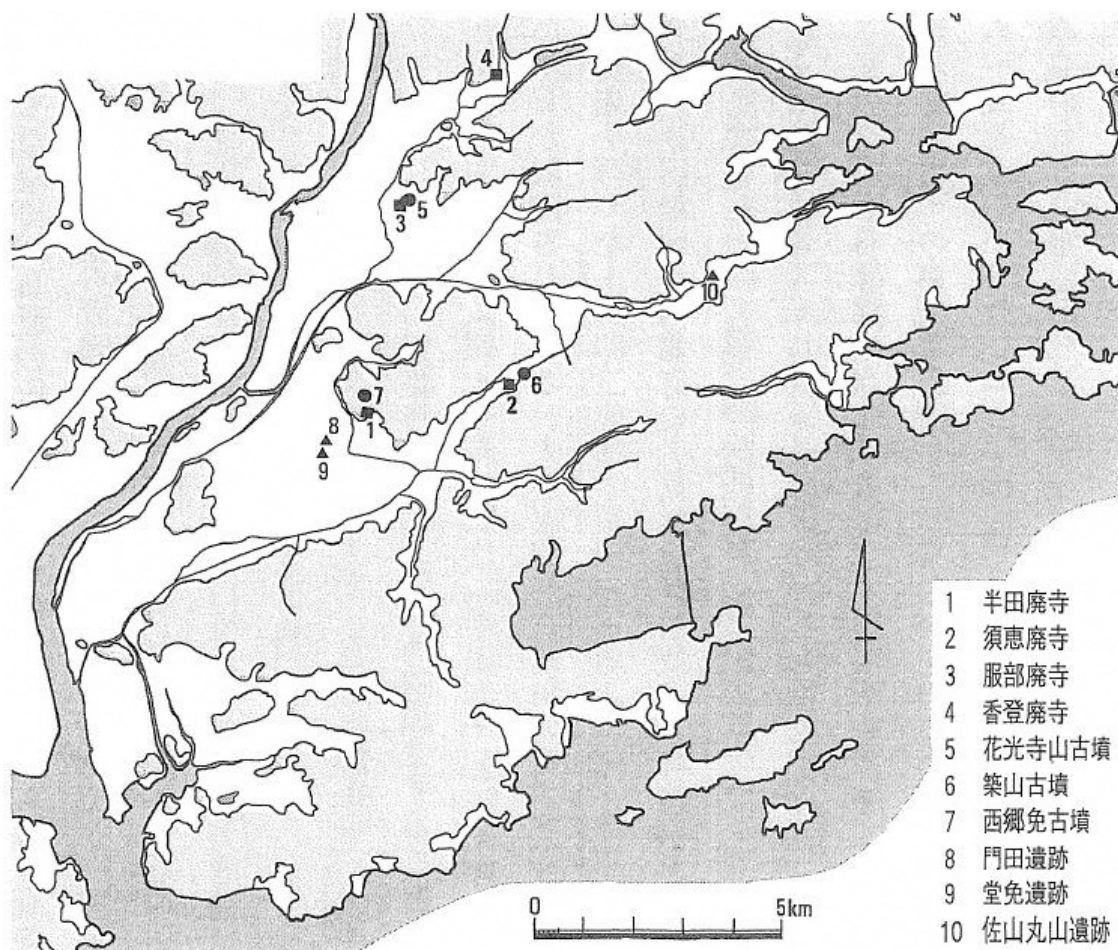
残された古代寺院に関する資料を展示しつつ、早くから寺院が建立された古代の瀬戸内市とはどんな地域だったのかを探ります。

### ◆仏教寺院の造営◆

仏教が朝鮮半島の百濟（くだら）から日本に伝えられたのは6世紀、日本で初めての本格的な寺院である飛鳥寺が造営され始める崇峻天皇元年（588）から、飛鳥を中心とした畿内で寺院造営が始まります。

地方での寺院造営は遅れて始まりますが、吉備地方（現在の岡山県と広島県東部）では7世紀前半の瓦が発見されており、このころ吉備の中心地で仏堂が作られたとみられています。

その後、吉備の各地で寺院の造営が始まりますが、当時の邑久郡（おくぐん、現在の瀬戸内市など）では、7世紀中ごろに、現在「須恵廃寺」と呼んでいる寺院が建てられました。



邑久地域古代寺院跡・官衙遺跡位置図

## ◆古代邑久郡の寺院◆

古代の邑久郡では、これまでに4カ寺の存在が確認されています。

- ・須恵廃寺（すえはいじ）長船町西須恵・7世紀中ごろに創建
- ・服部廃寺（はっとりはいじ）長船町服部・7世紀後半に創建
- ・半田廃寺（はんだはいじ）邑久町山田庄・8世紀初頭に創建
- ・香登廃寺（かがとはいじ）備前市大内（当時は邑久郡）・8世紀中ごろから後半に創建

7世紀中ごろの寺院創建は、地方としては最古級に属します。邑久郡には、古代地域社会の知識層である渡来系氏族が多く存在しており、彼らは仏教を積極的に受容していったと考えられています。古代の邑久郡は、先進的な文化であった仏教が、早くから浸透した地域だったようです。

### 須恵廃寺（すえはいじ）

長船町西須恵に「須恵廃寺」があります。美和神社の鎮座する広高山から西にのびる尾根の山麓に位置しています。東側には、築山古墳（5世紀末頃の前方後円墳）や古代の焼物である須恵器（すえき）を焼いた窯の跡（6世紀後半～8世紀）が10数基あります。

1987年2月、部分的に発掘調査が行われ、乱石積基壇と版築基壇が確認されました。建物の建っていた跡が複数見つかかり、正確な伽藍の状況はよく分かっていないものの、一辺100～150m四方程度の寺域が推測されています。

須恵廃寺では、瓦などが見つかっており、その様式から、寺の創建時期は、7世紀中ごろとみられており、8世紀前半から中ごろに完成形となったようです。邑久郡では最古の寺院です。鎌倉時代（12世紀後期～14世紀前期）くらいまで存在していたと考えられています。



朝鮮半島とのパイプあり!?

須恵廃寺の軒丸瓦 7世紀中ごろ

素弁八葉蓮華文軒丸瓦（そべんはちようれんげもんのきまるがわら）と呼ばれるもので、古新羅瓦（朝鮮半島系の瓦）の影響がみられます。

## ◆須恵廃寺をめぐる人々◆

現在の長船町西須恵・東須恵全域は、古代の「須恵郷（すえごう）」にあたる考えられていますが、須恵廃寺を造営したのは、須恵器生産を経済的な基盤として、須恵郷を支配していた豪族であろうと考えられています。

寺院に使われた瓦の様式から、この豪族は、寺院創建のころには朝鮮半島との独自のパイプを持っており、その後は、中央勢力との強い結びつきがあった一族だったと考えられています。須恵廃寺は、豪族の権威を象徴するものでもあり、須恵郷のシンボルでもありました。

また、須恵郷では、天平17年（745）、宗我部人足（そがべのひとり）という19歳の若者が、法華経や最勝王経などのお経を読むことができ、僧になろうとしていました。彼は、須恵廃寺で学んでいたのかもしれませんが。

## 服部廃寺（はっとりはいじ）

長船町服部の丸山に「服部廃寺」があります。東は花光寺山古墳（4世紀後半の前方後円墳）に隣接しています。

1991年3月、工事中に礎石が発見され、長船町教育委員会が緊急の発掘調査を行い、1992年度から1996年度までは、国庫補助事業として発掘調査が行われました。

7世紀末ごろに、中心的な建物である金堂と講堂が創建され、14世紀初頭ごろには廃絶したと考えられています。

寺域は、東西約150m、南北約150mもしくは215mがあったと推定されています。

長船町服部は、古代の「服部郷」にあたっていると考えられますが、この寺を造営したのは、服部郷を支配していた豪族と見られます。寺に使用されている瓦の様式から、この豪族は、中央勢力とのパイプを持った有力者であったようです。



### 服部廃寺出土の螺髪（らほつ）

服部廃寺でみつかった螺髪、つまり、仏像の髪の毛の部分です。螺髪は7点みつかっており、いずれも、金堂の須弥壇（しゅみだん）上から出土しています。

### ◆服部廃寺の伽藍（がらん）と仏像◆

発掘調査によって、服部廃寺の創建時には、金堂、講堂、東西の回廊や、その他の建物があったことが確認されました。

金堂の基壇は、東西19.2m、南北16.2m、高さ1.2mで、講堂の基壇は、東西32.7m、南北18mであったと推定されています。現在のところ塔の跡は発見されていませんが、金堂と講堂が南北にそろった四天王寺式の伽藍配置であったと考えられています。

発掘調査では、瓦や鴟尾（しび）、塼（せん）、螺髪などが出土しており、螺髪の大きさから、塑像（土を使って作られた仏像）の丈六仏（じょうろくぶつ、座った姿なら高さ2.4m）が安置されていたことが分かっています。

また、寺域内に銅や鉄の鍛冶炉が13基もみつかっており、寺院の維持管理、再建などに必要な道具を作った工房を備えていたとみられています。

## 半田廃寺（はんだはいじ）

邑久町山田庄に「半田」という地名があり、そこから古代寺院の瓦が見つかっています。

寺院跡であることを直接証明する遺構は確認されていませんが、『邑久町史』編さんに伴う地形観察により、半田集落の平坦地に、107m（古代の一町）四方の寺域をもった古代寺院が存在したと推定されています。

見つかっている瓦の様式から、7世紀末頃の創建で、12世紀頃まで存続したと見られています。

なお、「半田」地域は、古代の「尾張郷（おわりごう）」に含まれることから、「尾張廃寺」と呼ばれたこともあります。



### ◆寺院を造営した人々◆

古代の邑久郡で、寺院を造営したのは、どのような人々だったのでしょうか。

須恵廃寺のある長船町西須恵は、古代の「須恵郷」にあたり、古代の焼物である須恵器生産が盛んな地域でした。寺院を造営したのは、須恵器生産を経済的な基盤として須恵郷を支配していた豪族であろうと考えられます。寺院に使われた瓦の様式から、この豪族は、寺院創建の頃には朝鮮半島との独自のパイプを持っており、その後は中央勢力との結び付きがあった一族だったと考えられています。

また、服部廃寺のある長船町服部は、古代の「服部郷」にあたり、寺院を造営したのは、服部郷を支配していた豪族とみられます。寺院に使われた瓦の様式から、中央勢力とのパイプを持った有力者であったとみられています。

邑久町山田庄にある半田廃寺が所在する「半田」という地名は、渡来系氏族の秦（はた）氏と関わりがあると考えられており、半田廃寺も秦氏との関係が想定されています。

備前市大内（当時は邑久郡）に所在する香登廃寺（かがとはいじ）は、香登臣（かがとのおみ）という、渡来系の一族が造営したと考えられています。

古代の寺院は、それぞれの地域を支配する豪族が造営したと考えられていますが、とくに邑久郡の場合、朝鮮半島や渡来系氏族との関係がうかがえます。



関連資料：古代から中世寺院へ  
大賀島寺（おおがしまじ）の平瓦（ひらがわら）  
12～13世紀（鎌倉時代）

大雄山大賀島寺（瀬戸内市邑久町豊原）に残された古い瓦です。文様などの様式から、鎌倉時代後期ごろのものとして見られています。

ひし形の叩き目が全面に残っていますが、よく見ると、反転した「大」「賀」「嶋」「寺」の文字が印字されているものがあります。

これは、瓦をつくる時、叩き板に「大賀嶋寺」と書いて刻み、押し当てて叩きしめたために残ったものです。

### 【主な参考文献】

長船町史編纂委員会編『長船町史通史編』（2001年）・『長船町史史料編（上）』（1998年）  
長船町文化財保護専門委員会編『長船町の文化財』（2004年、長船町教育委員会）  
邑久町史編纂委員会編『邑久町史通史編』（2009年）・『邑久町史考古編』（2006年）  
湊哲夫・亀田修一『吉備の古代寺院』（2006年、吉備人出版）